

「わたしたちは大勢^{おおぜい}であっても一つの体^{からだ}です」

キリストの聖体^{せいたい}の祭日 (23.6.11)

このパンを食べる者は永遠に生きる (ヨハネ 6 : 58c 参照)

ちなみに、本日は、キリストの聖体^{せいたい}の祭日に定められていますが、近年^{きんねん}諸外国^{しよがいこく}では、イエスの最も尊い体と血の祭日に改め^{あらた}られています。

それは、恐らく中世のヨーロッパにおいて、礼拝行事に対する会衆の積極的^{せいじき}な参加は、大幅^{おほば}に減少^{げんしょう}し、ミサから離れて、関心が、もっぱら執行^{しっこう}される秘跡^{ひせき}に集中^{しゅうちゅう}されるようになり、結果的にミサに参加する代わりに特に、ご聖体^{せいたい}のみ集中し、ベネディクションや聖体行列^{せいたいぎょうれつ}というような御体^{おんからだ}だけを礼拝するようになったという歴史的経緯^{れきしてきけい}の結果ではないでしょうか。

ですから、第二バチカン公会議が、典礼の刷新を目指した結果、本日の祭日はイエスの御体と御血の両形態を祝う、祭日に変えたと言えましょう。

それでは、何時もの様に、今日の聖書朗読箇所を紐どいてミサの素晴らしい^{すば}神秘^{しんぴ}に近づいてみましょう。

まず、今日の福音朗読箇所^{きょうふりやうどくかしよ}によって、ヨハネが伝える御体^{おんからだ}と御血^{おんち}についてのイエスご自身の切なる思いを学んで行きましょう。

実は、今日の朗読箇所は、パンの奇跡 (ヨハネ福音書ではしるし)^{あと}の後、ご自分の御体^{おんからだ}と御血^{おんち}についての莊嚴な説教からの抜粋^{ぼつすい}であります。

しかも、感謝の祭儀 (エウカリスティア) が、テーマになっています。

ですから、イエスは次のように宣言なさいます。

「わたしは、天から降^{くだ}って来た生きてきたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」と。

ここで言われている「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」と言うくさりですが、ちなみに、創世記においては、罪を犯してしまったアダムとエバが命^{いのち}の木の実^みをも食べないように、楽園^{らくえん}から追い出されたのですが、ここでは、それとは対照的^{たいしょうてき}に、イエスこそが世を永遠に生かすためのいのちのパンであると主張^{しゅちやう}なさいます。

ここで確認すべきことですが、カトリック信者を生かすためだけではなく、世全体を生かすためと念を押されていることです。

勿論^{もちろん}、ここで言われている「世」とは、ニコデモとの対話で強調なされた、

次のようなおことばにほかなりません。すなわち、「神は、その独り子お与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである（同上 3:16-17）。」と。

さらに、ここで言われている「わたしの肉」ですが、マタイ (26:26)、マルコ (14:22)、ルカ (22:19) では、いずれも「体」という言葉が用いられていますが、イエスが最後の晩餐の席上、実際に語られたアラム語に相当しているようです。

ところで、ユダヤ人たちの反応を次のように伝えています。

「それで、ユダヤ人たちは、『どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか』と、互いに激しく議論し始めた。』というのです。

ですから、イエスは、次のように、核心に触れる説明を続けられます。

「アーメン、アーメンわたしは言う。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終りの日に復活させる。」と。

ここで言われている「肉を食べ」という言い回しですが、一般にはその人を殺すことを意味します。ですから、イエスが、この表現を用いてユダヤ人を驚かしてしまうのですが、実は、まさに逆説的に、人々が永遠の命に与ることを主張なさったのではないのでしょうか。

また、「血を飲む」ことは、ユダヤ教では厳しく禁じられていました。けれども、人の贖いのためにイエスの血を飲むことは、まさに永遠の命を得ることになると言うのです。

イエスはさらに説明を、次のように続けられます。

「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」と。

ここで言われている「いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」というくだりは、直訳的には、「わたしにとどまり、わたしもその人にとどまる。」となります。

ちなみに、最後の晩餐の席上、切々と語られた説教で、「イエスはまことのおどろきの木」について語られたときにも、「つながっている」と訳された同じ動詞が使われています。

さらにイエスの説教は続きます。

「生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生

きるように、わたしを食べる者も私によって生きる。」と、念を押されます。

そして、最後に大切な宣言をなさいます。

「これは天から降^{くだ}って来たパンである。先祖^{せんぞ}が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」と。

ここで言われている「永遠に生きる」ですが、ヨハネ福音書では、永遠の命^{いのち}というキーワードが、頻繁^{ひんぱん}につかわれており、その説明は、最後の晩餐^{ばんさん}が終わり、イエスがお一人で天の御父に向かって祈られた場面で、次のように説明しておられます。

「永遠の命とは、唯一^{ゆいいつ}のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです (同上 17:3)。」と。

ちなみに、ここで言われている「永遠の命」ですが、共観福音書では、この命が始まるのは死後^{しご}ですが、ヨハネ福音書では、まさにイエスを信じた時^{とき}にほかなりません。

皆が一つのパンを分けて食べるからです (一コリント 10:17b 参照)

次に今日の第二朗読ですが、使徒パウロがコリントの教会に宛てた手紙の中で、同じ御体^{おんからだ}と御血^{おんち}を分かち合うことによってこそ、教会共同体の一致が強められるだけでなく、共同体を絶えず育てていく原動力になることを、次のように強調しています。

「わたしたちが神を賛美^{さかづき}する賛美の杯^{さかずき}は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂^さくパンは、キリストの体^{からだ}にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢^{おおぜい}でも一つの体^{からだ}です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。」と。

ここで言われている「賛美^{さかづき}の杯^{さかずき}」ですが、おそらくユダヤ教の過越祭^{すぎこしまい}の典^{てん}礼用語と考えられます。ですから、わたしたちのミサこそ、イエスの御血^{みけち}が注^{そそ}がれている杯^{さかずき}こそ「賛美^{さかづき}の杯^{さかずき}」と言えるのです。

また、「一つのパンを分けて食べる」ことによって共同体の一致を強調しているのではないのでしょうか。

ですから、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は、その回勅「教会に命を与える感謝の祭儀」において、次のように強調なさいます。「聖体拝領は、キリストのからだである教会が一致するよう力づけます。・・・わたしたちは、キリストと一致して、互いに与え合い、恵みを分かち合います (同上 23 項)。」と。

わたしたちも、毎回、ミサを共に捧^{たもた}げることによって、わたしたちの共同体がキリストを中心に一致^{いつ}できるよう努^{つと}めましょう。

(118 頁への補足資料 23.6.14)

聖トマス・アキナス司祭の著作「ああ、なんと尊く、感嘆すべき宴だろう」

神の御独り子は、わたしたちがご自身の神性に与る者となることを望まれ、人間となって人々を神〔の子ら〕とするために、わたしたちの人間の本性をお受けになった。(受肉の神秘)、さらに、主はわたしたちから受けられたものをすべてを、わたしたちの救いのために役立てられた。すなわち、主はわたしたちを神と和解させるために、十字架の祭壇でご自分の体を生贖として父なる神に奉獻され、ご自身の血がわたしたちの生贖となるために、そして同時にわたしたちを洗い清めるために、血を流された。それは、わたしたちがみじめな奴隷から救い出され、すべての罪から清められるためであった。

しかも、これほど限りない恵みの記憶をわたしたちの保たせるために、主はご自身の体を食物として、ご自身の血を飲み物として、パンとぶどう酒の形態のもとにいただくようにと信者たちに残された。

ああ、なんと尊く、感嘆すべき宴だろう。なんと救いをもたらし、すべての甘美さにあふれる宴だろう。いったい、この宴よりも尊いものがあるだろうか。そこでは、かつての旧約時代におけるように牛や鹿の肉ではなく、まことの神であるキリストが食物として供えられていつというのに。この秘跡よりも感嘆すべきものがあるだろうか。

また、この秘跡にまさって救いをもたらすいかなる秘跡も存在しない。この秘跡によってもろもろの罪は清められ、もろもろの徳は強められ、精神はすべての霊的な賜物の満ちあふれによって養われるのである。

この秘跡は教会において、生きて人々と死んだ人々のためにささげられる。すべての人の救いのために制定されたものが、すべての人の益となるように。つまり、何人もこの秘跡の甘美さを、あますところなく表現することはできない。この秘跡によって霊的な喜びの源泉が味わわれ、キリストがその受難において示した最高の愛の記憶が新たにされるのである。

したがって、この限りない愛が信者たちの心により深く刻みつけられるように、主は最後の晩餐で、弟子たちと過越祭を祝い、この世から御父のもとに過ぎ越すにあたって、ご自身の受難の永久の記念祭、旧約の前表を成就するもの、ご自分が行ったもろもろの奇跡の中で最高のもの、そしてご自身が去られるのを悲しむ人々にこの上ない慰めとして、この秘跡を制定されたのである。